

エマオ途上の弟子に現れたイエス

ルカ福音書24:13-35
(新改訳2017訳)

- 24:13 ところで、ちょうどこの日、弟子たちのうちの二人が、エルサレムから六十スタディオン余り離れた、エマオという村に向かっていた。
- 24:14 彼らは、これらの出来事すべてについて話し合っていた。
- 24:15 話し合ったり論じ合ったりしているところに、イエスご自身が近づいて来て、彼らとともに歩き始められた。
- 24:16 しかし、二人の目はさえぎられていて、イエスであることが分からなかった。
- 24:17 イエスは彼らに言われた。「歩きながら語り合っているその話は何のことですか。」すると、二人は暗い顔をして立ち止まった。
- 24:18 そして、その一人、クレオパという人がイエスに答えた。「エルサレムに滞在しているながら、近ごろそこで起こったことを、あなただけがご存じないのですか。」
- 24:19 イエスが「どんなことですか」と言われると、二人は答えた。「ナザレ人イエス様のことです。この方は、神と民全体の前で、行いにもことばにも力のある預言者でした。」
- 24:20 それなのに、私たちの祭司長たちや議員たちは、この方を死刑にするために引き渡して、十字架につけてしまいました。
- 24:21 私たちは、この方こそイスラエルを解放する方だ、と望みをかけていました。実際、そればかりではありません。そのことがあってから三日目になりますが、
- 24:22 仲間の女たちの何人かが、私たちを驚かせました。彼女たちは朝早く墓に行きましたが、
- 24:23 イエス様のからだが見当たらず、戻って来ました。そして、自分たちは御使いたちの幻を見た、彼らはイエス様が生きておられると告げた、と言うのです。
- 24:24 それで、仲間の何人かが墓に行ってみたのですが、まさしく彼女たちの言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」
- 24:25 そこでイエスは彼らに言われた。「ああ、愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち。」
- 24:26 キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入るはずだったのでありませんか。」
- 24:27 それからイエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。
- 24:28 彼らは目的の村の近くに来たが、イエスはもっと先まで行きそうな様子であった。
- 24:29 彼らが、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕刻になりますし、日もすでに傾いています」と言って強く勧めたので、イエスは彼らとともに泊まるため、中に入られた。
- 24:30 そして彼らと食卓に着くと、イエスはパンを取って神をほめたたえ、裂いて彼らに渡された。
- 24:31 すると彼らの目が開かれ、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。
- 24:32 二人は話し合った。「道々お話しくださる間、私たちに聖書を説き明かしてくださる間、私たちの心は内で燃えていたではないか。」
- 24:33 二人はただちに立ち上がり、エルサレムに戻った。すると、十一人とその仲間が集まって、
- 24:34 「本当に主はよみがえって、シモンに姿を現された」と話していた。
- 24:35 そこで二人も、道中で起こったことや、パンを裂かれたときにイエスだと分かった次第を話した。

【祈りながら考えよう】

- (1) 失意落胆していたエマオ途上の弟子たちに、復活したイエスはどのように現れましたか。
- (2) 弟子たちと信頼と交わりを回復された主は、どのように何を語られましたか。
- (3) 弟子たちの心が内で燃えたのは、何によりましたか。

【解説】

(1) エルサレムからエマオの途上で

《ところで、ちょうどこの日、弟子たちのうちの二人が、エルサレムから六十スタディオン（約11キロ）余り離れた、エマオという村に向かっていた。彼らは、これらの出来事すべてについて話し合っていた。》

①二人の弟子たち

この記事は、ルカ特有の記事であるが、マルコ16章12節に言及がある。この「二人の弟子」はペテロをはじめとする使徒たちではない（33節参照）。他の弟子たちである。使徒の働き1章によると、主イエスの昇天後、五旬節の日の聖霊降臨にあずかるまで、エルサレムで祈っていた一団の数は、約120名ばかりであった。その中の弟子と考えられる。

ひとりクレオパという名の男である。もうひとりがだれであったかはわからない。彼の妻だったのかもしれない。エマオはエルサレムから11キロメートルほどの所にあった。イエスについて来たが、イエスは十字架にかかって死んでしまった。途方にくれた彼らは、寂しく自分の村に帰るところであったと考えられる。

彼らの心を占有していたのは、イエスの十字架の死であった。さらに、今朝方、女の弟子たちによって報告された、墓が空っぽだということであった。そんなことを二人で語り合っていた。

②イエスがともに歩き始める

《話し合ったり論じ合ったりしているところに、イエスご自身が近づいて来て、彼らとともに歩き始められた》
イエスのことが語られる所には、イエスが共に歩いておられる。これは今日も同じである。イエスは、イエスのことを語る所、そこにいつの間にか共におられる。

《二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいるのです》(マタイ18:20)
と、イエスは約束しておられる。方向違いなことが論じられていたとしても、主イエスのことが論じられる所にイエスは共におられる、そこで、その者たちを正しい方向に導こうとしていて下さる。

(2) 二人の目はさえぎられていた

《しかし、二人の目はさえぎられていて、イエスであることが分からなかった》

やがて見知らぬ人が近づいて来て、彼らと横並びになった。それはよみがえられた主であったが、彼らは《イエス》だとは、わからなかった。なぜわからなかったのか。《二人の目はさえぎられてい》たからである。

この「さえぎる」という言葉は「クラテオー」という言葉で、「固くつかむ、しっかり捕らえる」という意味の動詞である。弟子たちの心が何かにしっかり捕らえられていた。何にか。イエスの十字架の出来事である。そして墓が空っぽになったという出来事である。彼らの心はそこに捕らえられていた。これは私たちが経験すること。私たちの心が何かに捕らえられていると、傍らで起こっていることに気がつかない。私たちが主イエスのことを本当に知りたいなら、無心な心、他のものに捕らわれない心であることが必要である。

この世の考え方、人間経験に基づいた考え方に心が捕らわれていると、見るができない。なんにもない心で聞けば、必ずそこに、イエスが近づき、語りかけ、一緒に歩いておられることを見るようになる。

(3) あなただけが

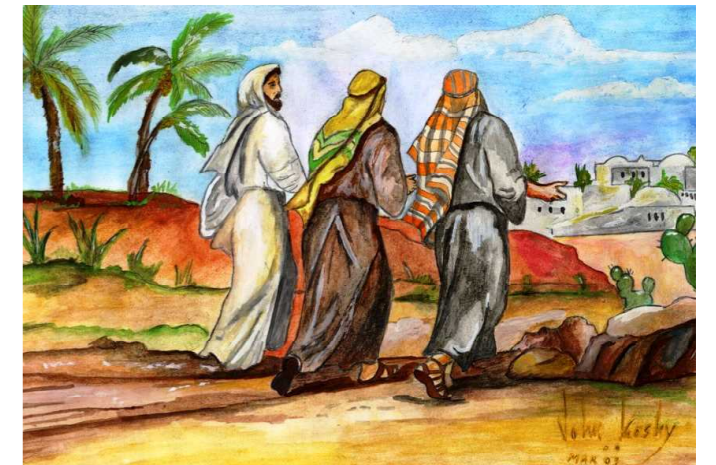
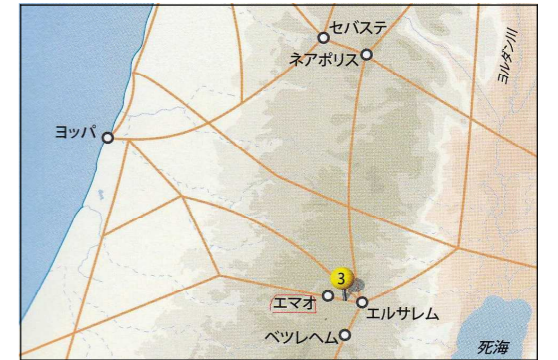
《イエスは彼らに言われた。「歩きながら語り合っているその話は何のことですか。》 正しい見方を与えるために、イエスは問いかけられる。

《すると、二人は暗い顔をして立ち止まった》 ここでわかることは、彼らが語り合い、論じ合ってきたことは、悲しい出来事であった。思わず立ち止まり、イエスに答えた。

《その一人、クレオパという人がイエスに答えた。「エルサレムに滞在しているながら、近ごろそこで起こったことを、あなただけがご存じないのですか。》

この二人は、イエスのことを、エルサレムの住人とは思わない。過越の祭りの時であるから、地方からやってきたユダヤ人でエルサレムに泊まっていた旅人であると思った。イエスの出来事は、ユダヤ、ガリラヤの周辺にうわさされていた。イエスが十字架にかかって死んだという出来事は、少なくともエルサレムの町の中であって、だれ一人知らない者はないほどに思われた。エルサレムに泊まっていた、どうしてそんなことを知らないのか。

クレオパは、なじるようにイエスに答えた。《近ごろそこで起こったことを、あなただけがご存じないのですか》
《あなただけが》と言っている。本当は、《あなただけ》、イエスだけが、全世界のだれよりも、この事実をよく知っている。しかしクレオパは、その全く反対を言っている。クレオパにとっては、なんにも知らない《あなただけ》としてここに言われている。



（４） どういうお方として信じるか

《イエスが「どんなことですか」と言われると、二人は答えた。「ナザレ人イエス様のことです。この方は、神と民全体の前で、行いにもことばにも力のある預言者でした。それなのに、私たちの祭司長たちや議員たちは、この方を死刑にするために引き渡して、十字架につけてしまいました。私たちは、この方こそイスラエルを解放する方だ、と望みをかけていました》

ここでイエスはさらに、この弟子たちに尋ねられた。イエスは、わかっているが、心にあるものを引き出しなさるお方である。

クレオパの答えによると、彼らが信じていたイエスは、どういうイエスであったかということが、言い表されている。彼らは、このお方こそ、わざにも言葉にも力ある預言者であると思っていた。このお方によってこそユダヤ人は救われる。この世に幸せがもたらされる。そう信じていた。しかし、そのイエスは殺されてしまった。そこに彼らの絶望があった。絶望をもって、むなしくエマオに帰りつつあった。彼らが信じていたイエスは、十字架につけられて死んで、お終いになるイエスである。つまり人間と同じである。

人間どんなに偉いことをやっても、死に直面したら、もう手も足も出ない。彼らが信じていたイエスは、人間の可能性の上に立ったイエスであった。

（５） イエスの復活に基づいた信仰

《死刑にするために引き渡して、十字架につけてしまいました》

イエスの死で、この弟子たちの信仰は吹っ飛んでしまった。十字架には神の贖いのみわざがある。これをはっきり証明するところのイエスの復活において、救いは実際となり力となる。

人間の可能性に立った信仰ではない。そんなものは吹っ飛んで、そうして、ここで初めて死を貫いた、悪魔に完全に打ち勝った復活のイエス、勝利のイエスの上に立った信仰が始まる。

人間の信仰は、人間が土台である。しかし神の子イエス・キリストを信じる信仰は、そんなものではない。人間の限界を越えた信仰である。十字架を通して甦られた、そしていっさいに勝利して天に帰られた、栄光の勝利のイエスを信じる信仰である。だから死も私たちに勝つことはできない。

《死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、おまえのとげはどこにあるのか》（Ⅰコリント15:55）と、死に対して凱歌を歌う。これが十字架と復活を経たイエスに立った信仰である。

（６） イエス様が生きておられる

《私たちは、この方こそイスラエルを解放する方だ、と望みをかけていました。実際、そればかりではありません。

そのことがあってから三日目になりますが、仲間の女たちの何人かが、私たちに驚かせました。彼女たちは朝早く墓に行きましたが、イエス様のからだが見当たらず、戻って来ました。

そして、自分たちは御使いたちの幻を見た、彼らはイエス様が生きておられると告げた、と言うのです。それで、仲間の何人かが墓に行ってみたのですが、まさしく彼女たちの言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした》

十字架の死、そして墓が空っぽ、イエス様が甦ったという御使いの宣言、このことが彼らを、いよいよわけがわからなくさせ、途方にくねらせてしまっていた。

もし彼らが、かつてイエスが語られた言葉を、そのまま素直な心で聞いていたら、この時、こういう出来事が起こった時、ああそうか、やっぱりイエスが言われた通りになったなど、すぐその事実を受け取れたはずである。

ところがイエスの言葉は彼らの分別で受け取っていた。イエスが言われたことを、そのまま受け取れていなかった。イエスの死と復活について、三度も弟子たちに面と向かってはっきり予告された。その他の場合も、多く色々な譬えの中で、言葉の中で、それにふれたことを言われた。それなのに、彼らの心には少しもそれがとどまっていなかった。しかし、イエスの復活は厳然とここに起こっている。

《御使いたちの幻を見た、彼らはイエス様が生きておられると告げた、と言うのです》

イエス様が生きておられる。「生きておられる」(和)ザオー(ζω / 英)alive)は現在詞である。あの時甦られたイエスは、ここに生きておられるイエスである。今から二千年前、御使いが、イエス様が生きておられると、現在詞で言ったこの言葉は二千年前も今日も、明日も明後日も、いつまでも変わらない現在詞である。永遠に貫く大宣言である。

（７） イエスの説き明かし

《そこでイエスは彼らに言われた。「ああ、愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち》

ちょうどパウロが、《ああ、愚かなガラテヤ人》(ガラテヤ3:1)と呼んでいるのと似ている。イエスは彼らを優しくお叱りになった。

《キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入るはずだったのでありませんか。」それからイエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた》

旧約の預言者たちがメシヤについて預言した通りのことがまさに起こったと、彼らが気づいていなかった。メシヤはまず苦しみを受け、それから栄光を受けることになっていた。

モーセというのは、モーセ五書のこと。創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記、この5つをモーセ五書という。またこれを律法とも言う。旧約聖書は、①律法(トーラー)、②預言者(ネビーイーム:歴史書(ヨシュア記から

エステル記)・イザヤ書からマラキ書)、③詩歌(ヨブ記、詩篇、箴言、伝道者の書、雅歌)がある。この三つから成っている。主イエスは、モーセ五書から説き起こして、聖書全体にわたって、メシヤ(すなわちご自分)のことを書いていることを説き明かされた。私たちにも同じ聖書があり、私たちの内に住む聖霊が私たちに教えて下さるので、私たちも、主ご自身について《聖書全体に書いてあること》を発見することができる。

（８） 求めに答えられるイエス

《彼らは目的の村の近くに来たが、イエスはもっと先まで行きそうな様子であった》

目指すエマオに近づいた。しかし、イエスはなお先へ進み行かれる様子であった。彼らはここまで11キロの道を歩いてきた時、語り合ってきた時に、何かこの旅人に(本当は復活のキリストであるが)心ひかれるものを覚えた。

《彼らが、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕刻になりますし、日もすでに傾いています」と言って強く勧めた》

この二人の弟子たちの、何とも言えない心細さがここに感じられる。単に道連れになっただけの人、と彼らは思っていたが、その人を引き留めて一緒に泊まってもらいたかった。

《イエスは彼らとともに泊まるため、中に入られた》

まだイエスだとはわからない。しかし寂しい心で、空しい心で、一生懸命求める。その求めに、イエスは聞かれる。イエスの愛のお心を思う。今でもそうである。求める者の求めを必ず聞いて下さる。そうして一緒にとどまって下さる。

（９） その目が開けて

《イエスは彼らとともに泊まるため、中に入られた。そして彼らと食卓に着くと、イエスはパンを取って神をほめたたえ、裂いて彼らに渡された》

ユダヤの習慣では、家の主人役の者がパンを裂いて分け与える。イエスはこの時、食卓について、主人役の場につかれた。

聖書の話の説き明かされて歩いてくるうちに、二人の心がこの旅人に対して、心引かれるものがあり、尊敬を持たしめられた。そして、イエスを主人の座につかせた。

この時のイエスのパンの裂き方、祝福のお祈り、そのことで、はじめて彼らの目が開かれた。かつてイエスと共に食卓にあった時、イエスのパンを取られたあのしぐさ、お祈り、そして、イエスが説き明かされた聖書の言葉から、彼らの心が開かれてきた。そして今、パンを取り、裂いて祝福されるその様にふれた時に、ハッと気がついた。

《すると彼らの目が開かれ》

「目が開かれる」という言葉は、次節の《聖書を説き明かして下さる間》という、「説き明かす」という言葉と同じ言葉である。これは前の、「目がさえぎられて」「心がにぶい」と真反対な言葉である。今まで目をさえぎっていたもの、とらわれていたものが、すーっと取られる。

今まで気がつかなかったものがワーッと気づかされる。今まで単なる旅人だと思っていた。そこにイエスの姿を見る。輝かしいイエスの御顔を見る。

この目が開かれて、イエスの姿が見えた時、二人の弟子たちはどんなに喜んだことか。狂喜するごとくであったろう。今までは絶望で、真っ暗であっただけに、本当にイエスの甦りということをそこに見て、いっさいの憂いも悲しみも暗さも、絶望も、一挙にすっ飛んでしまった。

（10） 心が内に燃えたではないか

《すると彼らの目が開かれ、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。二人は話し合った。「道々お話し下さる間、私たちに聖書を説き明かして下さる間、私たちの心は内で燃えていたではないか》

聖書がわかってくると、私たちの心は燃える。聖書から離れられなくなってしまふ。この心が燃えるからである。無味乾燥な心に潤いが与えられる。命を感じられない時に、生き生きとした命が内に燃えてくる。そこに聖書の不思議がある。ここに聖書を読んでいくこのエマオの道の不思議がある。

（11） 二人はただちに立ち上がり、エルサレムに戻った

《二人はただちに立ち上がり、エルサレムに戻った。すると、十一人とその仲間が集まって、「本当に主はよみがえって、シモンに姿を現された」と話していた。そこで二人も、道中で起こったことや、パンを裂かれたときにイエスだと分かった次第を話した》

彼らはエマオでその夜を過ごすことなく、《エルサレムに》急いで戻った。そこには《11使徒》と他の者たちが集まっていた。この「十一人とその仲間」とは、ユダを除く弟子たちを指し示す言葉である。ただ、実際には、ヨハネ20章24節からわかるように、11人全員がそこにいたわけではない。

エマオの弟子たちが嬉しい知らせを告げる前に、エルサレムの弟子たちは、「主はよみがえって、シモンに姿を現された」と大喜びで話し合っていた。

今度はエマオから来た二人が次のように言った。「そう、私たちは知っています。主が私たちと一緒に歩いて下さったからです。私たちの家に来られ、《パンを裂かれたときに》ご自身を明らかにしてくださったのです。」

